【注意】発行当時の原稿をそのまま掲載しております。農薬について記載のある場合は、最新の農薬登録内容を確認し、それに基づいて農薬を使用して下さい。また、成果情報によっては、その後変更・廃止されたものがありますのでご注意下さい。

［成果情報名］無加温パイプハウスを利用した他品目組み合わせによる周年栽培可能な「山形赤根ほうれんそう」冬春期新作型の収益性

［要　　約］無加温パイプハウスを利用した、「山形赤根ほうれんそう」の 11 月第 1 半旬～第 3 半旬播種、2 月下旬～3 月上旬どり栽培では、10a 当たり約 59 万円の所得が得られる。

［部　　署］山形県農業総合研究センター園芸試験場・野菜花き部
［連　絡　先］TEL　0237-84-4125

［成 果 区 分］普
［キーワード］山形赤根ほうれんそう、無加温パイプハウス

［背景・ねらい］

山形県の気象条件において、無加温パイプハウスを利用した夏秋期の野菜栽培は、収穫終期が 10 月下旬となるため、次作の冬春期の野菜はこまつな等に限られていた。今回、山形赤根ほうれんそうの 11 月播種、3 月収穫の新作型を開発したことから、その収益性を明らかにする。

［成果の内容・特徴］

1　冬春期に無加温パイプハウスを利用する「山形赤根ほうれんそう」の新作型は、播種が 11 月第 1 半旬～第 3 半旬、収穫が 2 月第 4 半旬～3 月第 2 半旬となるため、夏秋期の他品目と組み合わせることができる（図１）。

2　本作型の収益性は、10a 当たり粗収入が約 110 万円、所得は約 59 万円/10a が見込まれる（表１）。

［成果の活用面・留意点］

1　「山形赤根ほうれんそう」の新作型の栽培技術は、令和元年度成果情報「「山形赤根ほうれんそう」の冬春期新作型」を参照のこと。
2　「山形赤根ほうれんそう」の前作の後片付け期間を考慮して、播種時期を決める。
3　適応範囲は、冬期間にハウスサイドを開放管理できる地域である。
4　播種はシーダーテープを用いて、条間 15 ㎝、株間 12 ㎝、2 粒播きとし、本葉 2 枚展開時までに 1 本に間引いた。

［具体的なデータ］

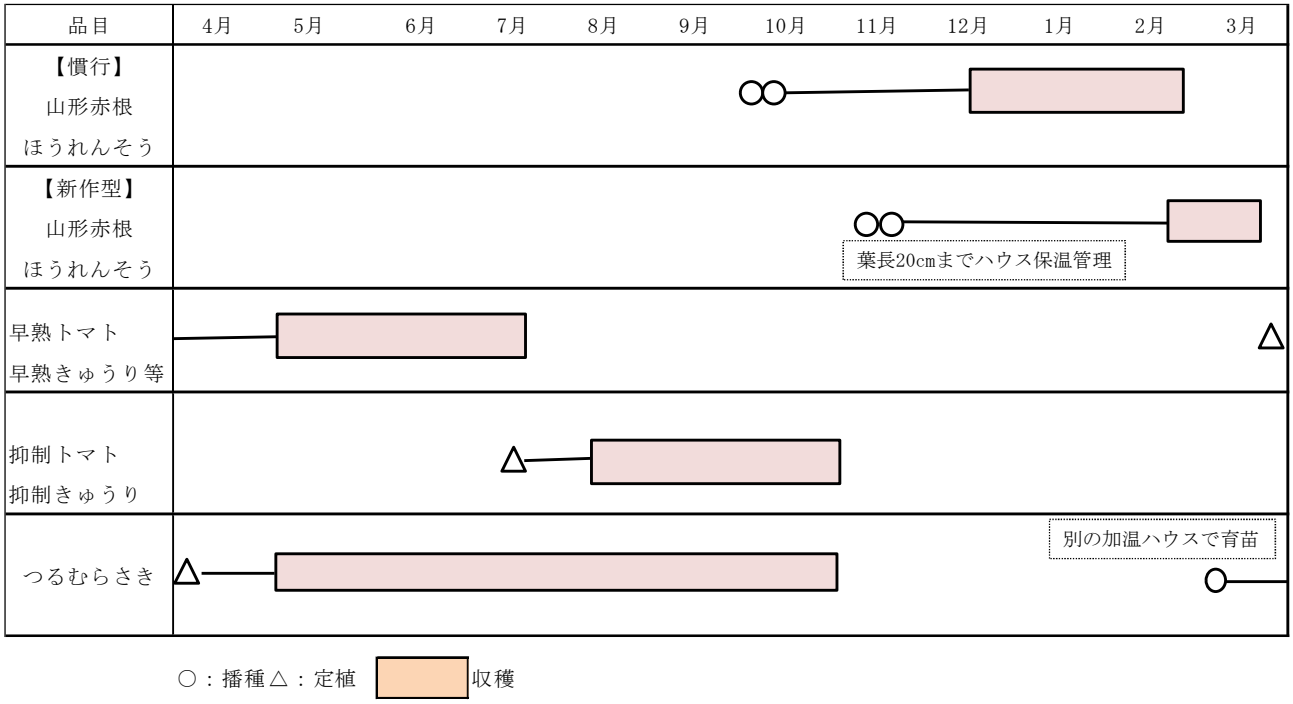

図１　山形赤根ほうれんそうの新作型と他品目を組合せた栽培暦

表1　山形赤根ほうれんそうの経営試算結果

項目				金額等	備考
粗収入		収量	(kg)	1,950	1)
		単価	(円/kg)	560	2)
		粗収入	(円/10a)	1,092,000	
経営費	生産費	種苗費	(円)	36,000	3)
		肥料費	(円)	21,000	1)
		農薬費	(円)	2,000	3)
		動力光熱費	(円)	4,000	3)
		諸材料費	(円)	2,000	3)
		小農具費	(円)	15,000	3)
		減価償却費	(円)	216,000	4)
		小計	(円)	296,000	
	流通経費		(円)	204,750	3)
	合計		(円)	500,750	
収益性		所得	(円)	591,250	
		所得率	(%)	54.1	
		所要時間	(時間)	661	3)
		8時間当たり所得	(円)	7,156	

1）H30試験成績結果から算出。
　栽植様式：畝間130cm、ベッド幅80cm、条間15cm、４条植え
2）ＪＡてんどう販売単価（H28～H30）から算出
3）葉菜類振興指標を基にH30試験成績結果及び現在の資材単価実績から算出
4）減価償却費：ハウス周年利用で３作を想定。経営規模は水稲10ha、露地野菜1haを想定

［その他］

研究課題名：やまがた型特産野菜の省力高収益周年栽培技術の確立
予算区分　：県単
研究期間　：平成 30 年度（平成 28～30 年度）
研究担当者：齋藤謙二、中川隆彰、島貫源基　　発表論文等：なし